

季寄
解
改正月令博物笈
五月部
二

六





五月之部目録

△印ハ能潜の
季々持りぬ

○養生の法○風雨の老○米の豊凶
○妙業其外人家重法の事ハ所々
ハ数多ある故目録ニハある事

五月

卦 月支 調子
陰陽生 異名
初丁

芒種節

△梅雨
△夏至中

日令

此部ハ五月日の定リル事
ハ好ク見ル事

上如茂足揃

△松本祭

秋首蒲

△首蒲興

草蒲葺

△内膳司供早瓜

五日節會

△左近真手番

騎射

△右近真手番
△端午節

端午男女衣服ハ

△生花の式

日五 日四 日三 日朔



△菖蒲引 △永根 △菖蒲曼 廿

△菖蒲茶 △菖蒲樹 △菖蒲花 △菖蒲帯 △ちまの佩

△菖蒲酒 廿 △蘭湯 △菖蒲湯 廿

△菖蒲胃 △煎懸の甲 廿

△懺 △やう甲 廿 △印地打 廿

△藥日 △製神懸 廿 △藥玉 廿

△長命縷 △結命縷 △避兵縷 △備連 △五月王

△藥草摘 △葉神 廿 △競折 廿

△五月鏡 △百鍊鏡 △神水 廿

△笹粽 △節粽 △錐粽 △秤錘粽 △飾粽 △菰粽 △芦粽

△柏餅 廿 △射粉團 廿

△退水神 廿 △桃印府 廿

△艾人 △蒲人 廿 △画天師 廿

△去鳩鵠舌 廿 △鼻美 廿

△競渡 △鳥車 廿 △負端午文 廿

△加茂競馬 廿 △藤木林祭 廿

△生流鋪馬 廿 △関明神祭 廿

△六日菖蒲 廿

△宇治祭 廿 △植竹 廿

△室祭 廿 △今宮祭 廿

△雨社祭 廿 △有無日 廿

△虎涙雨 廿 △佳吉御田植 廿

△山田御田扇 廿 △祇園に洗 廿

月令 此部は八日の定まらざる五月一ヶ月の定まらざる

△最勝講 廿 △賑給 廿

△富士どり 廿 △内宮外宮御田植 廿

△瀑布 △麻布 △生布 △木平 △半平 廿

日八廿 日三廿 日八 日六

△半復生 サナハヒナガサ 花 ハナ △大原 オホハラ 花 ハナ

△繡 イロドリ △草 クサ △花 ハナ △單羽織 ヒラタテ △花 ハナ

時令 トキノサト 此部より七月の時侯 ココロノトキノサト

△五月雨 イツメ △梅雨 ウメノアメ △花 ハナ

△五月闇 イツメノヤミ △白 シロ △花 ハナ

草木 クサキ 此部より五月二月の草木のさかぬもの

△櫻 ウツクシ △花 ハナ △雲 クモ △山 ヤマ △花 ハナ

△柘榴 シロバナ △花 ハナ △繡 イロドリ △樹 キ

△女貞 メデヒ △花 ハナ △南 ミナミ △天 テン △花 ハナ

△栗 クリ △花 ハナ △杜 ト △花 ハナ

△要 ユウ △花 ハナ △合 カ △花 ハナ

△榭 セ △花 ハナ △百 ヒャク △花 ハナ

△車 クルマ △百 ヒャク △花 ハナ

△児 コ △百 ヒャク △花 ハナ

△秋 アキ △百 ヒャク △花 ハナ

△系 ケイ △百 ヒャク △花 ハナ

△紅 ベニ △花 ハナ △天 テン △花 ハナ

△蜀 シヨク △葵 アオイ △錦 キン △葵 アオイ

△龍 リウ △葵 アオイ △宣 セン △州 シュウ △花 ハナ

△下 シモ △毛 モウ △花 ハナ △金 キン △花 ハナ

△金 キン △花 ハナ △銀 ギン △花 ハナ

△夏 ナツ △菊 キク △荷 ハ △香 カウ

△時 トキ △計 ケイ △草 クサ △威 イ △天 テン △仙 セン

△單 タン △李 リ △美 ミ △容 ヨウ △柳 リウ

△酢 ソ △持 チ △草 クサ △花 ハナ △蛇 ヘビ △子 コ

△載 サイ △茶 チャ △花 ハナ △草 クサ △石 イシ △花 ハナ

△接 セツ △葵 アオイ △花 ハナ △天 テン △南 ナン △星 セイ △花 ハナ

△苔 ケ △花 ハナ △朝 アサ △菊 キク

△豌豆引 廿九 △蠶豆引 廿九

△花且見 廿八 △花菖蒲 廿九

△菖蒲 廿九

朝露州 廿九 長根草 廿九

△救娘釣草 廿九

△萍花 廿九 △藻花 廿九

△鐵線花 廿九 △撫子 廿九

△田植 廿九 △早乙女 廿九

△田歌 廿九 △田草取 廿九

△早苗 廿九 △菱花 廿九

△若竹 廿九 竹品類 廿九

△艾明 廿九 △真菰刈 廿九

△石菖 廿九 △和布刈 廿九

△海帶刈 廿九 △李子子 廿九

△揚梅 廿九 氣條桃 廿九

無花菓 廿九 天仙菓 廿九

△枇杷 廿九 金月梅 廿九

△杏子 廿九 櫻桃 廿九

△桑実 廿九 △青小柚 廿九

薑 廿九 △生胡桃 廿九

△早松茸 廿九 △茄子 廿九

△新茄子 廿九 △瓜花 廿九

△早瓜 廿九 △胡瓜 廿九

△姫瓜 廿九 △粟時 廿九

△稗時 廿九 △柀時 廿九

△胡麻時 廿九 種植 廿九

生類

此部は五月一ヶ月のうぐ
のいさかきをもつて一しらす

△獸狩

△射

△照射

△鹿子

△魚藻

△魚藻

△水雞

△黑鴨

△諸鳥

△水鳥巢

△諸鳥

△諸鳥

△毛で替鷹

△鶯

△鶯

△鷓鴣

△鷓鴣

△鷓鴣

△蛆

△初蟬

△蟬

△小簾

△蠶子

△蠶子

△水馬

△鼓虫

△鼓虫

△蛇脱皮

△蟻

△蟻

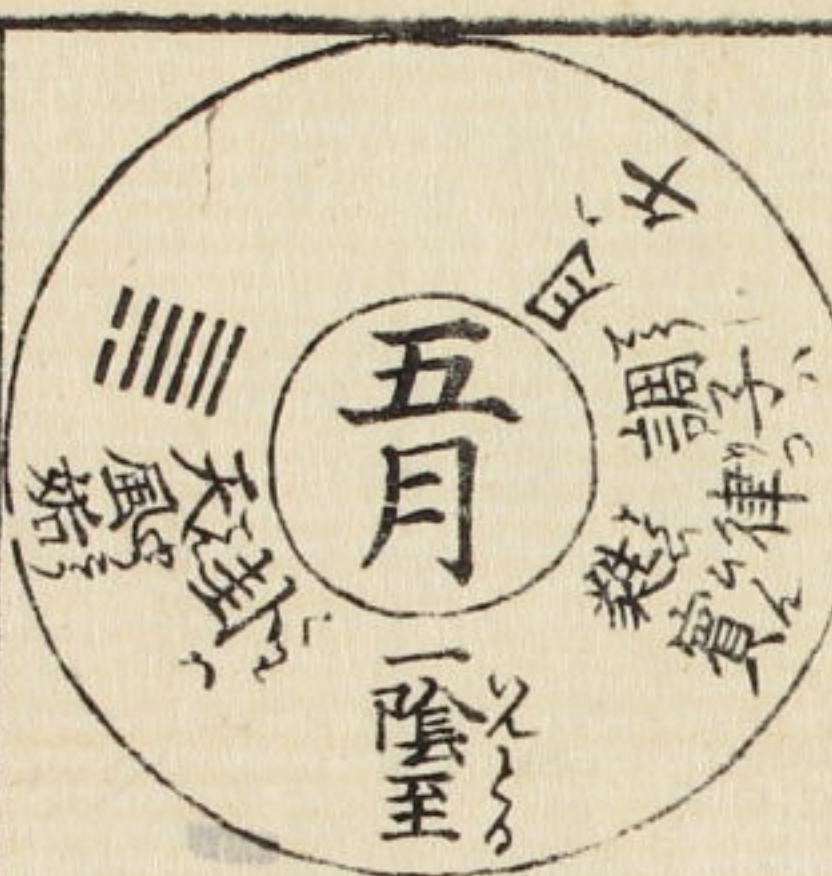
△必用

此部は風雨の占○破軍の向方○
日取の吉凶○他行の心得○作事の

よし○西○料理献立の法食物の好悪等と
の外重法のご品をあらむ尤日の定りたる
事ハロの日令の部はあり爰ハ日のごと
まうまう五月一ヶ月の要用のうぐあつむ

五月之部

△印ハ季を
持つりのあり



冬至ハ一陽
生たる如し
夏至ハ又一
陰生たる
陽極って
陰生する

○天風姤ハ女の莊んある卦ハ嫁
よりりし不貞のあらあり

異名

△仲夏
△鷓鴣月
△皋月
○南訛
○蒲月
○夏

五△夏半
盛夏△蕤賓△芒月
△早苗月
いつろ月△いづのいろ月

たぐさ月
莫傳
吹去月
藏玉
△たぐさ月
△さくし月
△月を月

異名註

△仲夏ハ夏のかりん
△鷓鴣月ハ月令ハ日

月令鷓鴣首とつる故名づく鷓
首ハ星の名あり。南訛ハ書經

平秩南訛とあり夏時物のさかんなり變化とんさくして

○蒲月 蒲ハ菅蒲の事○夏五夏のふらむ△夏半是も夏の

あつぱく 盛夏あつこの盛こかり
△蕤賓蕤ハ下ハいて主ハ賓ハ客ハ

陽氣上よきなると陰氣主人とありて客と敬するの義なり即

ち五月の律あり○早苗月ハ早苗ととも月なれりなり○さ月

さあ月と畧あつたりなり
⑤ 秘藏 さくを月

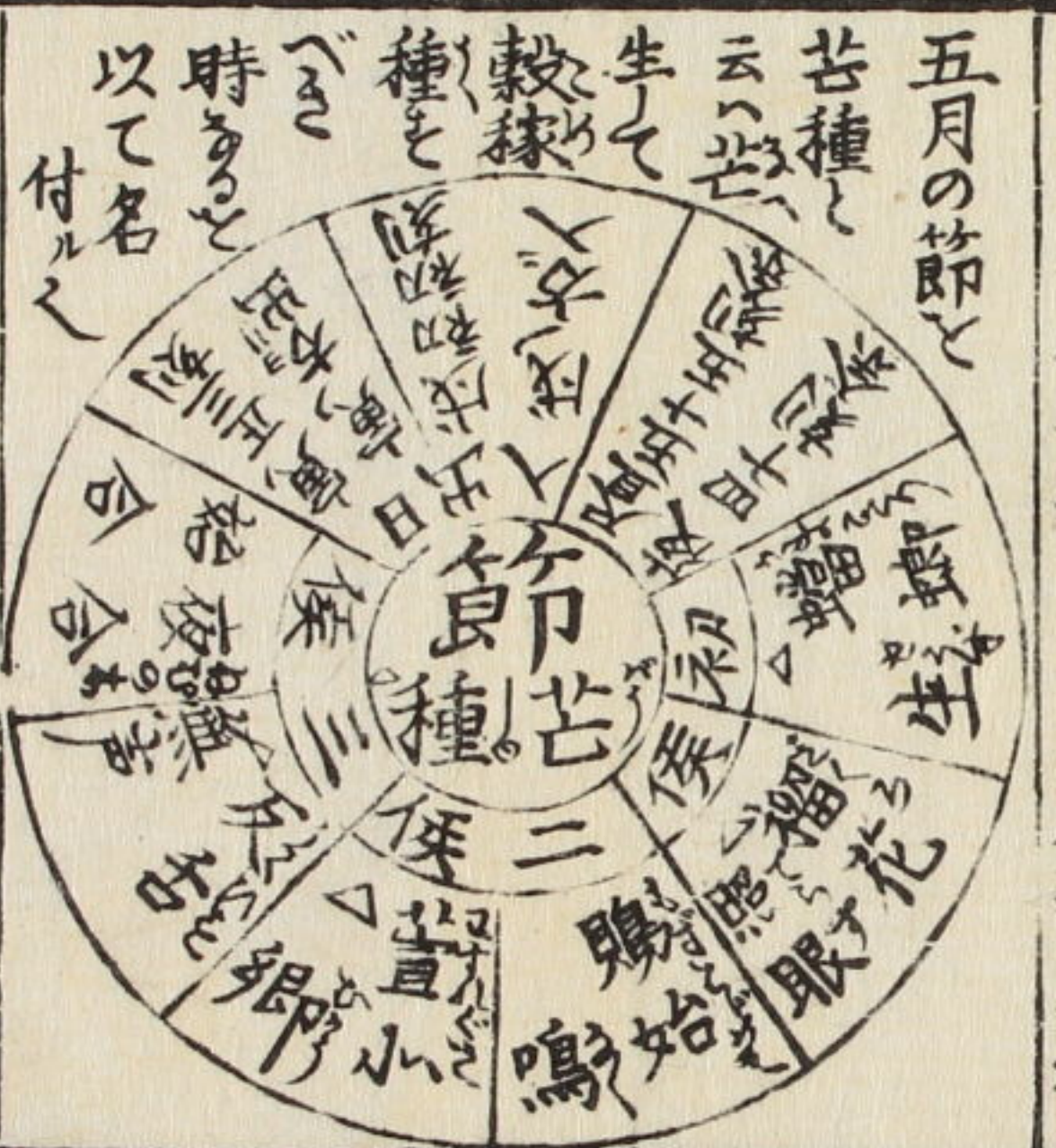
沁透ありあつてもほはあめり
あふかざつさくも月として

藏玉 ほくもを月
ふ月夜の晴るもるをぬきま

月と守月といひさくもらん
全 たらされ月

さくも代り橋月の名成るまで
あふむじのたれいさくもらん

節 芒種七十二候の草木七十二候
○昼夜長短の日の出入等を記す



五月の節
芒種
云ハ芒種
生ハ
穀種
種ハ
時多
以て名
付ル

○蟻螂ふらの氣ハ陰なり此月一陰下ハ生さるる微陰の氣ハ

感して蟻螂が生さるる此虫を物又向入時ハ向入とありらる

○鶉ハ陰類物を好むと害する鳥ハ一陰の已ガ好氣の生

くるふ感して鳴るの反舌ハ鶯なり是ハ春の始陽氣を悦んで来り鳴く一陰の氣とさけて音を入らり

節占候

今日雷多ハ豊年
雨降ハ旱の

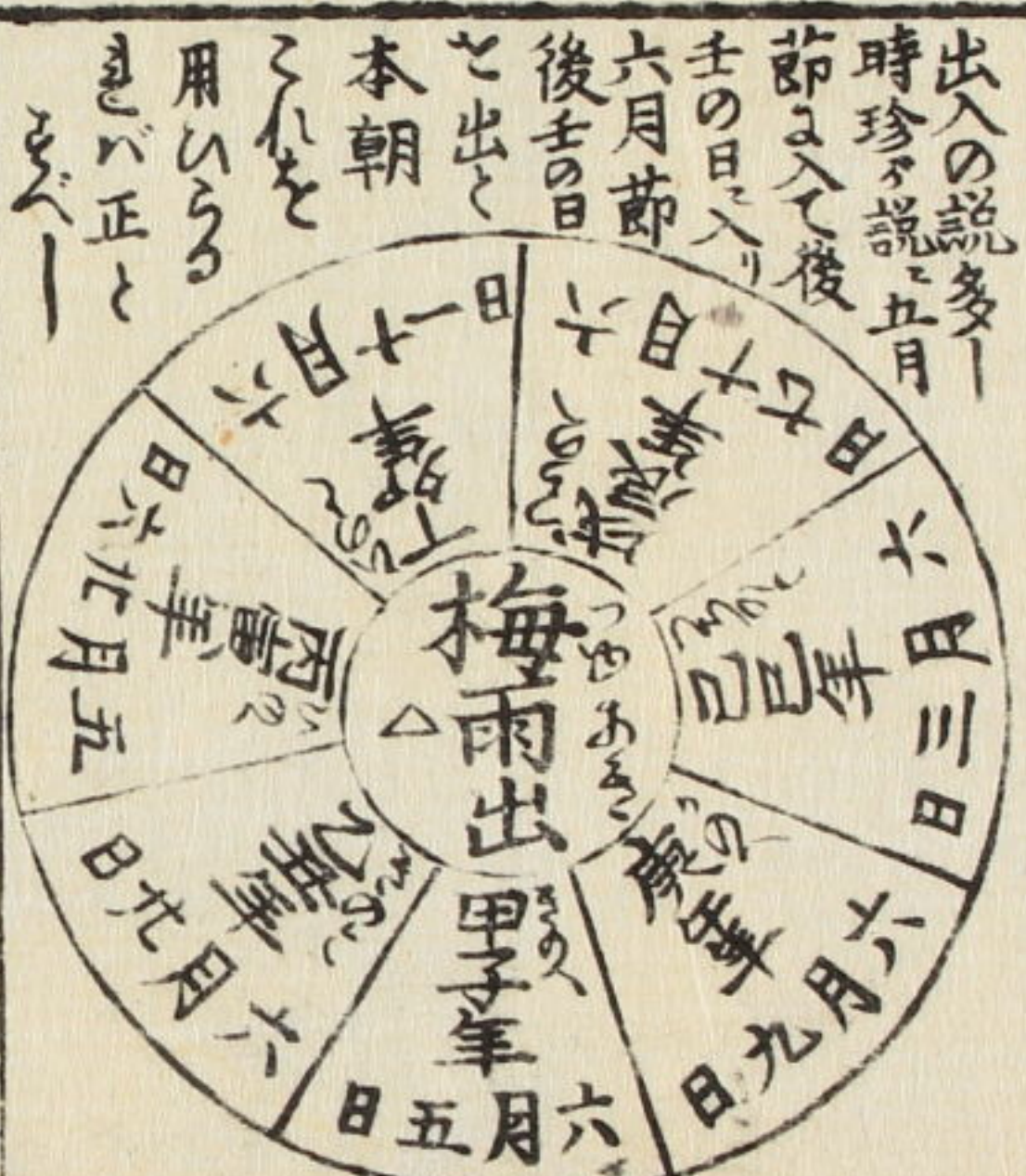
兆穡多く空一〇芒種の雨一
寸五分ハ梅雨一尺ハ當るといふ

是をききあふ此日雨ふとてハ
多くハ旱〇雨ありといへとも多

つゞ〇日中ハ一丈の竿を立て
景と測る四尺二寸五分ハ此をす

梅雨出の説

次の丸の内記を
支年のはじめ



按より五月梅まると黄と落
んとす石榴の花ひきき栗の花

とら蟻の子らまふ躍るの比
長雨あり身を梅雨といふ雨

甚ど多うすとつてもあつて
石ぞ入る物くいと生を雷鳴

を以て出梅とす〇京師鳥丸中
立賣下町のちまき又大徳寺

門前の人家のしろ子又梅
雨の穴あり其時は至道ハ水と

つづ晴んとすれハ水うら〇提
州丹生の山田栗花落理左衛門

宅は井あり徑三尺深サ一尺梅
雨は入て水必く出梅の比水ハ

梅 天気

梅雨ハ多く西風南
風とて山の端ハ雲

多く風アれた時ハつづ風と
空ハ雲多く天氣くくると

あり出ると是とつづとつて此
雨の内朝東風二三日はあて

吹ハ空も白くも是と船揺風
とつて雨とつて〇雨ありと

とどろく雷鳴をいそしめ頃と守然
とどろく梅雨の内は雷少なく
鳴る洪水と主なる夜鳴り或は沖へ
入り入りのいそいで宜うば

◎新題林

重條

養老の志を争ふはい比を
雨の色はく梅もあづし

①連句の志を争ふは梅の西昌林

②花のいそいでいそいで梅の西昌林

③詞のいそいでいそいで梅の西昌林

④俳言浦ぬもいそいで梅の西昌林

⑤術妙梅雨水 蒸入貯へ置べし

⑥癬疥を洗へ其痕うつるを

⑦将香油と造まば熟し易し其外

⑧衣を洗ふは用まば灰汁はじ

⑨ちるまども此水久しく貯へば

⑩○はるましかびるを去るはびら

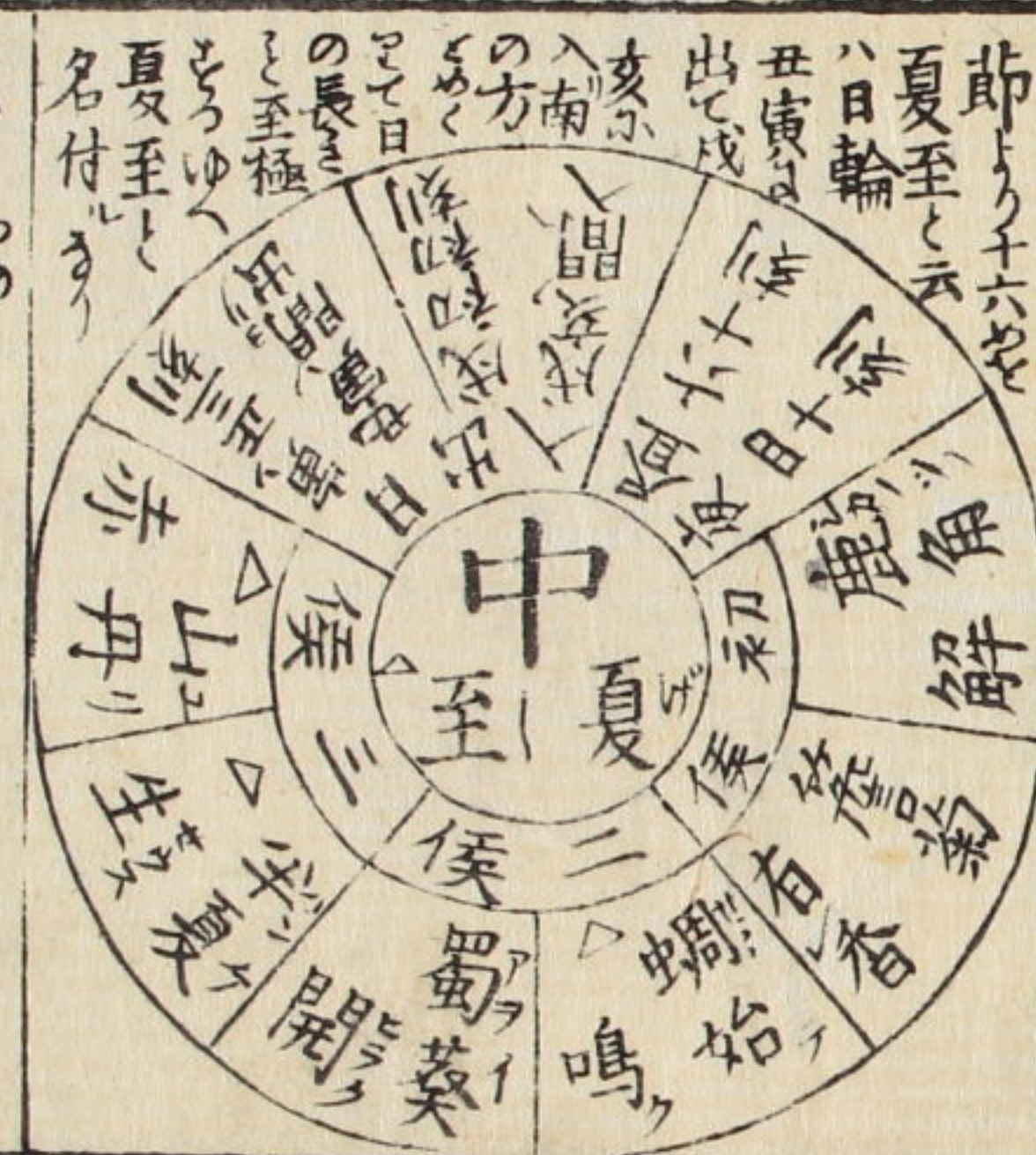
⑪を用以頻にこす即ち落る

梅 養生

梅雨中の湿を養
散るは蒼木と

火を焼て煙とわづべし雨湿を
病と生むるをくま

中 △夏至の七十二候。草木七十二候
○昼夜長短。日の出入等左記ス



鹿の角のいそいで三ツあり左右合
せて六ツあり十一月は一陽生

此月より六陽終り一陰生する
氣小感して角と落る鹿の

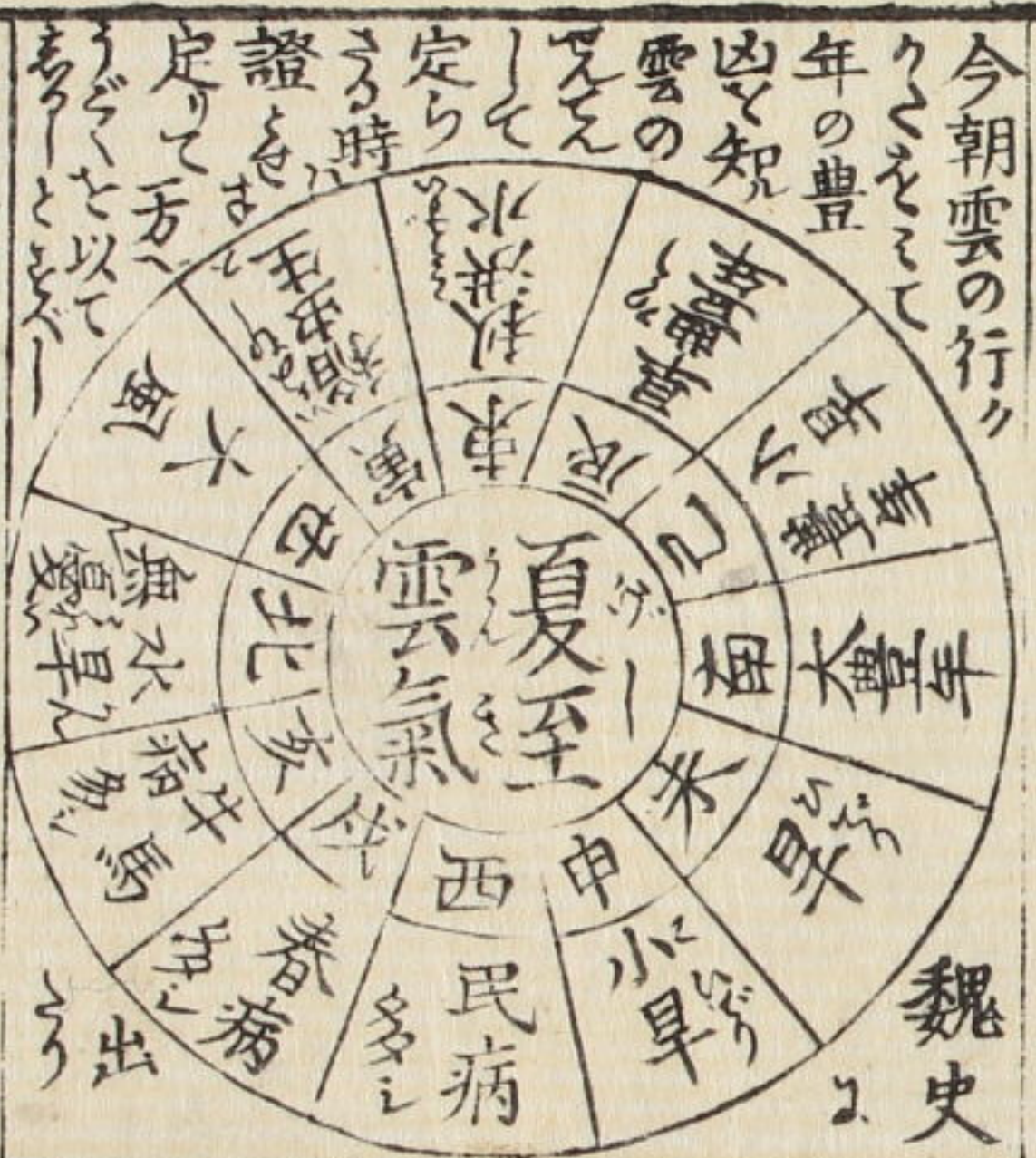
六月めて生むるのく○蛸

いせりあり其声を聞く小人の心ととぬーむる陰虫あり
 微陰を感じて鳴ると△蟬の初声ともいふ○半夏の曆の時候
 かし△半夏生とあるて種物とくすは古代より此前後を以てうゆ物多し其時をとりぐると生る草あり

夏至天氣占候 夏至の日

西南の風あれば六月は洪水あり
 ○晴天をまは六月暑氣つづく
 旱く○北風吹は水さうりめで
 夏中夕立多く米穀ゆとらへ
 ○夏至中旬ふまは豊年あり
 下旬ふまは米價貴し○當日雨ふるは淋時と久雨と主る
 去りくるとは小雨の宜しとす
 ○黒雲多るとは水難とす○日小
 暈あまは洪水あり○雷鳴は

六月ひどり甚し○午の時南方小赤雲あるは五穀大ふまのふ赤雲さく日月の光さくは五穀ふのど人病多し



夏至養生 夏至の當日井とく

水を改まは瘟疫と瘧
 び○夏至の日夫婦の交りをもや
 と瓜忌む千金方又出するの
 月令に此日葚ふふく其外を
 きりのを食せと淫欲を犯と
 居くはくは今日日の長き事極
 る陰陽争天地死生かてり男

子齋戒く声色と止り騷事なく
心氣と定め保養と云ふ日あり

日令 此部は五月二十月日の主
より事支の定より事と記し

天氣 湖 今日晴天をれい五穀
よかば雨多くなりて大風を早
米價貴し北風ハ猶さう悪し

○東風半日吹は終
日吹ハ米の價貴し

養生 今日
沐浴

○無病ハ
上賀茂 芝揃
して老いど

近江 祭
祭も

南都 眉
間

天氣 今日晴
篠ありし

献 草蒲
奉ふとあり

草蒲輿 左右の近衛兵
衛の六府あり

免の輿と南殿の階は東西
立又時の花をかりし

京 高雄虫千三
日より九日を

四 草蒲葺
軒置とあり

玉葉集 公雄
今日とあるをみそをなす

形造ありちる蓬生乃宿
非草蒲とく形所の形つぎ起波

此頃よを盛夏よさり毒虫多
く生とるふより軒は蓬草蒲

をかきりとりも虫の入り
ぬきどあいやり

蓬草 是もある
江 戸 三の
祭 輪

棟 葺 俗ふせんえ
肉膳司

供早瓜 山城の御園より 供へ奉るる

五不成 天氣 本朝茶賈の 諺ふ四イケ三

五が五とつてあり四月三日

と今日との晴と以て豊凶と

定め價の高下とを情と

豊年曇を凶年とある

五日節會 天子武德殿より出 御さうて宴會

と行りし群臣は酒を賜ふこ

人々皆あやめのふくくとかく

ふ典薬頭はくえと奉る事

さどありと公事根元よ出

左近真手番 左近乃馬 場にて騎射

とる事あり右近の馬場小

とい六日と是といとりの日と

り今日近衛の隨身禡の尻

と引折てきるゆふひをりの

日とい左近のあり手番は五月

三日右近は六日あり能人の受は

かろくじたり 騎射 馬引

くへる山川 五月五日

豊楽院を昔ハ弓と御覧せ

とあり是を馬弓といふ

年中 行司の服はあまなほにきりて

ひらけはまゆと今やあらん為盛

端午節 端午とい初五とい

五の始る日とい今月の五は始る

端といはれどもちやとも訓ず

或は五月五日ハ重五といふ又

午は月まのより端午とも書え

一説ハ午といふハ五の字

と通用ともいふ

五日異名 重午 重五

端五 端陽

地臘 蒲節 解粽

天中 艾節 朱符

異名註

重午午の月昔の
午の日と用ひこれ

ハカニハルむまゝなり△重五
ハ五月五日をればなり△解粽

節ハちまねをとりてあり

○端陽ハ正陽ハ同。地臘ハ

一陰生ざるなり其外の異名
文字のよきなりありてころろ

艾節ハ世日蓮きて作る虎を門ハ掛
けく邪氣を拂ふ也

端午衣服 今日より帷子を着す
袴どき色又浅黄

女衣服 女もひとへのもす
力あつてびく

上巻ハ色筋のありせういふ
おとよしの色筋をうけるを

めとこと節句ハ花あやめのも
やうなり或ハむくさたいらなり

生花之式正 菖蒲花菖蒲
石竹蓬

菖蒲引

菖蒲花 新勅 前関白

深さぬまきふありりあやめ
年の終るるたきとほひをひく

夫木 寄菖蒲祝 為相
君代よりしるしむきさくけの

夫木 江中菖蒲 仲正
あやめまひくとやあけありて

詞 時涙のあふれぬまてひく
ぬまこふるて行ふあや

長海ふかりをらて引

菖蒲五字對句

揮鎌若轉月 緑成玉床席

拂水生連珠 顔兼清夜娛

永根 哥はあやめかたね根
しよむるり永承六年

五月五日ふあめめの根合とらふ
くありしう著問集又出さう

夫をさ招のたはくといふなり
くハヤもこのひさりるらん俊頼

菖蒲鬘 聖武帝の時、初
綾日本紀又出さう

菖蒲案 菖蒲生流を黒木
の案にて奉ることあり

菖蒲枕 夫木 俊頼
床付くふあめめの

はくくかへきとれそく
まもやよりのみりくさ **菖蒲**

帷子 菖蒲浴衣 宗和
非 彩のほも上裏あやちをひ

菖蒲帯 棟佩 菖蒲
携を

どつて帯物とするくと悪氣と
辟ふくと證類本神出づ俗云

せんこの木といふものあり
非 棟佩てつてしやまひ者嵐雪

菖蒲酒 石菖と切て酒ふ
たりて是との心雄

黄を少くをりりてまじく
より一切の邪氣をとらる 非

不血や若の下さる **蘭湯** 蘭
菖蒲酒家定

湯は入てゆめとするくと
大戴礼に見へたり

菖蒲湯 百部菖蒲万病と
治とらふり 蘭湯を

この故事よりおころさるべし
非 湯あてもふふる菖蒲道

菖蒲刀 いぬへ菖蒲と
りてかざる今木

刀のさうそ菖蒲づりといふ
非 刀のさうのちりさうと移竹

菖蒲甲 削懸の甲
是も菖蒲之鱗

幟 飾甲 此日幟甲とわらふ
事ハ光仁帝の時蒙古の

賊来る早良親王討手と
て出陣あり親王伏見うらの
森社に祈る時小五月五日忽よ
風吹て戦いどして勝事を得
たり此例ふより月のく唐ふも
今日武事とありて戯をを
と事類書纂要に出る自
然は此月武備とありと和漢
習合せしむるべし

非 瘡瘡の注とあり小懐る其角
女は子いぬやうのりりか 律人
松塔りよ作向てのりりか 移行
狂 刀をいし海美いりや ちるあ先み
細もよとあり紙の海りる 紅雪

印地打 童の小弓と持て戯
ころし印地とよほごの跡の地付て
印地とくあるふよりて名付る
非 ちるあ先みわくは地のをつて嵐
は出てなる味たり印地少 後竹

薬日 新撰六帖 貫之
時もあくたさすあや
先茶経そんより日はさうしけり
○今日と茶日といひ茶草と取
或の丸散と調合とあり中に
も今日制といひ茶を記す

紫金錠 諸毒と解腫物と
消し毒虫とさる神方あり
五倍子 廿目 大戟 十五 續斷子 十枚
麝香 五枚 右細末して丸と其外
豊心丹 固本丹 延齡丹 反魂丹等
とあり今日調合とあり

或の神麴 今日製と
石一明日もとあり 薬玉
分 夫木 中宮上総

あふとくよりたあまあへ
らとりのあしぬとあま
○今日茶草と五色の糸とて
のへ臂ふかくと悪氣を拂ふ
とる哥もあまらとあり

長命縷長命縷續命縷續命縷辟兵縷辟兵縷辟邪縷辟邪縷條達條達皆某玉の事なり五月五日の神正立

非某玉と云ふは楚の神正立

詩 續命縷之詞 萬楚

西施西施謾道浣春紗西施ハ異美人ナリ

浣紗石ハ碧玉今時閨麗華故事ナリ

碧玉モ春秋ノ時ノ美婦之器量ヲクセラバアラフツ

眉黛眉黛奪將萱州色ナルハ草ノ碧丸

ヨリハ色紅裙妬殺石榴花モスツノ紅イナルハ花ノウルハシク見事ナルヲ子タムバカリナリ

新歌一曲令人豔唱テウタヘハメ

ツラシク人々ノ心モ酔舞雙眸ウキタツバカリナリ

斂髻斜酒ニ酔テ舞ノ袖ヲカヘシ目モトニ風情ヲフクミ

誰道五絲能續命タリ

シカラ五絲續命ノ故事ヲイヒツタヘレコノ妓ガヲ見テ却令今日汝君家ニ其美態イヲ失ヒ死セント思フバカリナリ

藥草摘 今日採をば

て製競前是も百草を採

馳競狩茶獵と云

月ふる闘百草

の草とせ合せて勝負を争ふ

神水 今日千の時雨ふる急

病を治す或は丸茶を製す

五月鏡玉葉 為家

五月鏡玉葉 為家

五月鏡玉葉 為家

五月鏡玉葉 為家

五月鏡玉葉 為家

五月鏡玉葉 為家

源のます鏡々々々 百練
かきやうゆり知々々

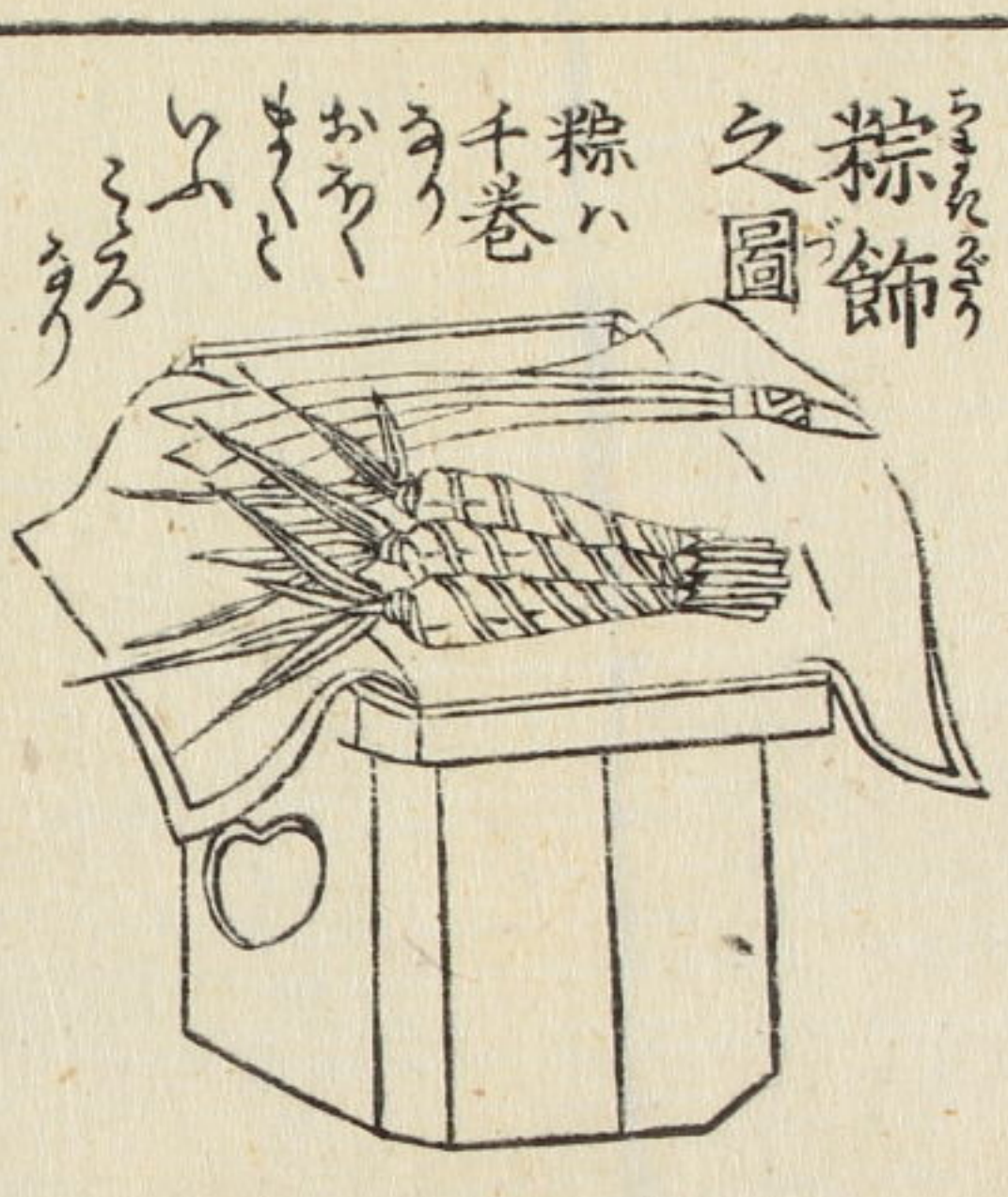
鑑 今日午の時楊子江にて銅
を百さびさびとて明鏡を

鑄るに事文類聚に出づ
是を以て本朝哥ふも詠す

粽 異名粽 錘粽 秤錘粽
菱粽 九子粽 角粽

金盧粽 篋粽 餉粽
飾粽 菰粽 粽伊勢也

粽飾之圖



拍餅 ひうあらの葉に
はりゅう 拍も神道

小用ゆめをそなたりのるれが
ゆらゆらなる屋一 くらべま

今日のかざりの毒邪と拂入
たれ夏ハ毒虫多く人の家小

も入り来りにより粽ハ蛇の形小
表と是と食す色ハ彼を降伏

とる心して夏の中口をこいふ
き事を表して祝まをさへ

狂者ふふふとれよよと命の
狂者ふふふとれよよと命の

粽もハ子夜も粽をば 行安

詩 粽之詞 唐履之

南薰應律轉宋旗 五月八午

方ヲ主ル 火帝衆離錦席披
色赤シ

夏ハ火應レテ神ヲ火帝トス易
ニテハ離ノ卦ニアタリテクワ鼎ニ坐

席ヲ 榴吐千花采羽蓋クガ
カザル 莫開五葉拂

口ノ花ノ紅キヌ 莫開五葉拂
ガサニ映メ美シ

瑤瑤ヨウヨウ 堯ノ時莫英アリ下月ニ

瑤瑤ハタミシクニワ 禁裏ノ御庭ナリ 承盤セウパン 錯出

仙人掌セシニ 天ノ甘露ヲ承盛ル器ニ

織女オリメ 絲ヒ 故事ヲ用フ 復道フクダウ 龍舟

方競渡カタキワタ 以日蛟竜舟ヲサヘ

街恩マチオン 更許ミヤコ 向昆池ウケニ 天子ノ恩

ラエテ御池ニ舟ヲ浮ヘル

蛟食芳辰ウツクシヨウジン 屈原今日酒

人これを祭る其祭供を蛟龍の

五色の糸を以て繫ははく

の始め委しく本篇

博物全に見へり

射粉ウツクシ

團ウツクシ 世は宮中にて團子と供

是を射めて食する事天寶

貴事キコト 退水神ツイスイカミ 唐士高辛

小沉コシヅメ 其其水神ミミヅカミ とまりて人

をよす故は五色の糸を

蛇ヘビ とるや水神ミヅカミ を

るやま 桃印符ウツクシ 唐士高辛

ねは篆字セウジ 符ウツクシ と書

術ウツクシ 赤靈符セキレイウフ 今日

形カタ 虎トラ の形カタ 決ツク る門カド の

うふかるる

艾人アイジン 唐士高辛

形カタ 虎トラ の形カタ 決ツク る門カド の

うふかるる

戴艾虎

唐土にて艾虎を虎を作して黒豆を

まゝ小虎を色々此糸にて作り

艾の葉を

ついで頭をかき

て

邪氣と

画天師

張天師の像を

画にかき

又玉を

作て艾と

毒氣を

こころと

本朝

元三大師の御影

と

去

鶺鴒舌

零陵記に鶺鴒

飼五月五日其

舌の尖を

吞れ

物つひ声

非致身や

粽でた

梟は美

けり

のあがり

ものと百官

賜へ

は漢書

出

渡

鳥車永馬

屈原

心して

今日競渡

のた

水馬

とも

つう

車と

つひ

楫を

狀賀端午文

左

尺牘

端午之

日

祝規

目

の

度

堪

餽

賞

不

顧

不

粽

一

折

楚

粽

後

敢

敵

希

留

之

菖

尺牘 上中下各替

午日祝規 ①天中佳節 ②端

午之定秩 ③五綵糸節 浴蘭

節正屆 ④進飲賞 ⑤多壽万

福 ⑥壽詞何盡 更欣躍 ⑦

多快欣々多々 更不顧不腆

⑧不憚輕儀 ⑨不羞菲薄 ⑩

無論鄙品 薄締輕帷單衣

楚粽角粽 黍粽菰葉粽 從

例 ⑪謹因舊規以奉獻 ⑫

逐儀例獻納 ⑬菲儀以投

希笑云々 冀笑存鑒我肯

曝 ⑭惟鑒納為幸 ⑮請願

留

狀 同報答 左リ尺牘 漢文アリ

涉仗時文始午 為佳茶

辱使傳蒲節之 吉辰

足事之 位者一打 俾其

送 鮮美嘉魚 以

結接衣境人 祝之 意 涉云

錦 堯莊 飛 偶人 與 豎 童

以 懸 情 以 示 貴 久 愛 納

蒙 箇 厚 賜 誌

仕 以 從 約 之 教 久 禮 了 述 人

拜 謝 期 多 日

尺牘 上中下各替

辱使來使傳命 ①勞貴介

蒙使命 ②恭承顧命 傳蒲

節々 ③賀端陽之辰 ④祝

綵縷佳節 告令辰 送鮮

美云 錦鱗下賜 珍魚

芳惠 嘉魚 錦兜莊麗

玉飾奇偶 綺羅金人

與豎童附小子 授豚兒

蒙箇厚貺 辱賜數品 更授

多儀 叨蒙分惠 拜謝

對使拜喜相逢 以謝之 拜

受無顏暫待異日

妙治眼病 絳の袋 柘榴の

術花を盛で 今日眼を洗ひその

まゝ是を棄るゝとて 小汝我

病を代とて 唱へ 治より事

妙なりと養生雜記 又ちるべし

治淋病 苜蓿根を取細末して

たしるゝ置阿膠と等分合して

用ゆ兩三度用ひて治るべし 治久痢

今日鯉の枕骨を黒焼あてた

るゝ置くべし久し止りしもの

痢病よりえて其効神のおど

不病痢病 今日へいづらご取

朝露をわけて置つ水こそ香ばその

年痢病のやを流行ともうづ

ぬと妙し 衣服虫をぬる法 今

日昔の葉とてて櫃箱の中よ

入置ばおのづゝ虫を生ぜざらる

蠅のつらさる 百部のつらさる

蠅とのとさるぬめてあつこを

とぬつこ此哥を三返唱へ白乃

字を四方の柱に逆さるふ張り又

岡とつ字を棟よても天井よそ

綵縷佳節 告令辰 送鮮

美云 錦鱗下賜 珍魚

芳惠 嘉魚 錦兜莊麗

玉飾奇偶 綺羅金人

與豎童附小子 授豚兒

蒙箇厚貺 辱賜數品 更授

多儀 叨蒙分惠 拜謝

對使拜喜相逢 以謝之 拜

受無顏暫待異日

妙治眼病 絳の袋 柘榴の

術花を盛で 今日眼を洗ひその

まゝ是を棄るゝとて 小汝我

病を代とて 唱へ 治より事

妙なりと養生雜記 又ちるべし

治淋病 苜蓿根を取細末して

たしるゝ置阿膠と等分合して

用ゆ兩三度用ひて治るべし 治久痢

今日鯉の枕骨を黒焼あてた

るゝ置くべし久し止りしもの

痢病よりえて其効神のおど

不病痢病 今日へいづらご取

朝露をわけて置つ水こそ香ばその

年痢病のやを流行ともうづ

ぬと妙し 衣服虫をぬる法 今

日昔の葉とてて櫃箱の中よ

入置ばおのづゝ虫を生ぜざらる

蠅のつらさる 百部のつらさる

蠅とのとさるぬめてあつこを

とぬつこ此哥を三返唱へ白乃

字を四方の柱に逆さるふ張り又

岡とつ字を棟よても天井よそ

綵縷佳節 告令辰 送鮮

美云 錦鱗下賜 珍魚

芳惠 嘉魚 錦兜莊麗

玉飾奇偶 綺羅金人

與豎童附小子 授豚兒

蒙箇厚貺 辱賜數品 更授

多儀 叨蒙分惠 拜謝

對使拜喜相逢 以謝之 拜

受無顏暫待異日

妙治眼病 絳の袋 柘榴の

術花を盛で 今日眼を洗ひその

まゝ是を棄るゝとて 小汝我

病を代とて 唱へ 治より事

妙なりと養生雜記 又ちるべし

治淋病 苜蓿根を取細末して

たしるゝ置阿膠と等分合して

用ゆ兩三度用ひて治るべし 治久痢

今日鯉の枕骨を黒焼あてた

るゝ置くべし久し止りしもの

痢病よりえて其効神のおど

不病痢病 今日へいづらご取

朝露をわけて置つ水こそ香ばその

年痢病のやを流行ともうづ

ぬと妙し 衣服虫をぬる法 今

日昔の葉とてて櫃箱の中よ

入置ばおのづゝ虫を生ぜざらる

蠅のつらさる 百部のつらさる

蠅とのとさるぬめてあつこを

とぬつこ此哥を三返唱へ白乃

字を四方の柱に逆さるふ張り又

岡とつ字を棟よても天井よそ

藪の下へ放置けが登長くこゝぬ
す蚊を辟る咒 今日午刻儀方

の二字を書て家内の柱の中へ
かきん粘り蚊をさる又酒と蚊の
葉にそぎて座の四方の隅に挿
せば蚊も其條をすかりとぬる

又法 今日午刻燈心を油の内へ
浸し日輪をひいて天上の金雞

蚊子腦髓の液を喫ると右の咒
文を返唱へ念し終りて太陽の

氣を吸て燈心の上へ息を吹さ
夜今この燈心は火を点とれば蚊

こゝろを去る 又法 今日浮萍を
とり陰乾めて細末を樟腦を

加へて拌せ彈子の大きき丸にて
毎晩の蚊を火くして焚く家内

の蚊もくを水とる 物見ま
人ふ物忘れさせぬ法 今日龍の爪

を衣服の領の中へ入置ば物忘れ
やむ夫婦中悪さを和順する術

今日鳴鳩の足は骨ととりて絳の
袋に入男の左の手の右の手の付け

置べし又常々 京 賀正競馬
袂に入るとは

ひ馬。赤方黒方として左右につ
かひて馬をくくべしとるなり

非 けるる人やあはれる上は貴
狂 一さふかあなるくくべし

もくさるあもはる令儀は貞柳
△は膝に森祭。は馬あり此祭の古

実の幟甲の下 大坂 生玉を馬
記と 天王寺太子

堂法事 大和 天神 近江 関
日の刻 音集

神祭○三井寺南院祭神輿出御
○大津高山寺貴船祭

六 六日 菖蒲 夫木 衣笠内大臣
いふせん今六日の

あめまをむく人もるをせむる
非 六日六の菖蒲の初は入菖蒲は悟文

六日六の菖蒲の初は入菖蒲は悟文

七 京 今官祭 八 山城 宇治祭

申中 陸奥 相馬中村野寺 妙現大祭 三 不成 就日

栽竹 龍生の節 又竹醉日とも 竹迷日とも 今日竹を移

植まば能活て繁茂とてい入 雨を名竹も碎一日のふ余其角

播磨 室明 五 京 今官祭 紫野にて

是と執行と下松と云誤御 歳所二廿九日ふ有し 江戸 黒目

不動地主早尾 和泉 堺天 神祭 京

永観堂大般若轉讀 百萬遍念珠出る 大坂 天

寺大般 丹後 九世戸の 龍燈 正月 七日 大

坂 天王寺金堂 本尊秘法刻 八 京 今官御 興洗

上御靈 廿 不成 就日 二 大坂 天王 寺太

大般若 日 一 就日 日 二 大坂 天王 寺太

子堂法事 音樂午刻 三 京 清水田村 管忌 近

江 坂本兩 五 有無日 村上天皇

の御國忌に依て今日禁裏小 政事ふ然其急用あり行

りくゆ 江戸 揚弓結 界惣會日 虎

有無と云 江戸 揚弓結 界惣會日 虎

涙雨 今日曾我祐成討とる 日るり其妻虎愁傷せ

一 只今日うる雨を虎が涙と云之 排は中ふとるいゆる虎が雨移竹

狂 秋の別とをひきき厄ふる 日奉れ虎の毛をもち引守 未得

京 下京中道寺祭 新住吉祭 江戸 芝居 曾我

祭 江戸初芝居よきためて曾我 物語をよみ此報恩に今日法

樂の奇舞妓とさうり。白銀
路鳥は森神明祭。目黒不動

泰の薬研 大坂 住吉御田
堀不動泰 植今日堺

乳守の遊女御田とさうり幸む
く宮女悪瘡の愁あつて宮中

と出て乳守はさぬよ此病と住
吉の神よいのるあるあつて神託

くと諸人よ面とさししやうと
さぬさすべしとさうりてまのり

女よまじり正田をさうへる悪
瘡たらしめしあつてこの例を以

てそれより乳守の遊女も田植女
とさうりてさうりてまのり

とさうりてまのりてまのり
とさうりてまのりてまのり

とさうりてまのりてまのり
とさうりてまのりてまのり

とさうりてまのりてまのり
とさうりてまのりてまのり

伊勢

山田御田扇。官司より
扇を出してまのりてまのり

常の扇よりいり大さへ内宮の
扇は骨七本外宮の扇の骨は六

本檜とつら松の画すこい惠
比須の朝とつら上り墨繪の板

行ある藤々りさ物も社人あ
りて此扇を持て舞うとまのり

御師より遠近の諸屋敷へ送
らる恒例ありこのあまのり

あたまの邪氣を除く田圃と作
る者能みく凶年はとまのり

晦京

祇園神輿洗ごよひと
こい基四条宮川のやと

あつて水とそきや具とそ
あつてあつてあつてあつて

おの役者おのう家々の挑欠を
とがさせてまのりてまのり

いゝ真ある見物と 和泉
てらんよとまのり

堺方違 明神祭

月令 此部より五月一ヶ月日の定まらざる事もある

最勝講 東大寺。奥福寺。延暦寺。園城寺の僧と

講師として清凉殿に講せらるる
年中行司 内大臣

百重や五月の山は雲くく
いづれいづれも家君のくく

ついで草小御講の賑給は
燼とあるは此事と

とくく民小米塩など給ふ事
年中行司 嗣長朝臣

何れい民のま奈とりくく
くくこの病を君やくく

富士垢離 来月上旬より
七月に至るまで

登山と尤百日浴水潔齋と
但江州の人七日精進して登る

伊勢 内宮外宮御田植の
たまりたる大神事

て長官車をいざい **瀑布**
規式ともなご多し

△生布 △半きじ △木平 夏の部
△麻布 △布きじとくハ季よ

きくば雑布ともくも雑
夫木 仲正

むくくその畑のまの卵は花や
姦くくくく子作り乃布

晒賣 榎町へおの
おくく曝布賣風至

半夏生 五月中より十一
日めまり此あら

半夏生どろどろといふ農家
け日の前後と考て物で蒔き

大原 丹波國大原の社へ
参詣せると云三月九

三日参詣せると春さりと云九月
廿三日参詣せると秋さりと云

糸 薄物 單物 **花** 古代
帷子

の漆色シロしつろ寛正六年慈照院殿大追物御見物の時射手の装束マツの白帷シロを着きて是こ以て考まいはしめるは其外也也

狂キヤウ意イををててふふるる帷イ子シははるるここハハひひりりととここををひひくくふふ 久清

非ヒ米メままくく蘆アいいははるる 薄ハク 吟インややののどどがが花ハ白ハク枝シ 翠スイ羽ウ織ウ織ウ

非ヒののちちうううう風フウををああまますすやや落ラク羽ウ織ウ玉タマ芝シ 羽ウふふううむむむむおお織ウももほほせせしし其其角カク

時令 此部より五月の時候よりかゝる事とあつむ

五月雨 こつとわめ梅雨ウツ黄梅雨ウツ鶯雨ウツ ささきとまき△ささきとまきの五月雨

クダルの畧リョウををうう△ささきとまきの雨アメををううととせせととれれややららぬぬ月ツキののかりかり

新亭 藤原定家朝臣

玉タマ祥サウのの乃ノ彩サイ人ニののこころろつつままををととふふへへててややどどろろふふ月ツキぬぬののをを

家集 河五月雨 信実

五月ぬふアそらち川をたさきせい
あらやうつこせくのむりま本
家集 山家五月雨 雅有

あびる人を朝のうれ竹枝かへて
くたせあをさ水れ五月ぬ
續古 海辺五月雨 家隆

かしくふ塩汲あゆむ海士人の
社やなさんさみくまこれぬ
千載 仲綱

はみされいとぬの糸の社ぬきて
あか塩とけろ波の浮きや
御集 江五月雨 後九年内大臣

五月ぬれ久くさうぬほのほの
ゆさあいのさのひまやあうん
夫木 五月雨有餘 右衛門

五月雨のをさきろをこれわらうと
たさきれあし乃さうりもさ
詞 目ぬふる。きん芽日。とやみあふ。

さきまはるた。月の初染もさうぬ水
ほさる。朝のけり。松まふさう。見
ぬ山門の敷き人。雲ぬさき。雲と

つる。むさかりを云。朝のやちもよそ
みさ。むさかりを云。朝のやちもよそ
系。同。人のそと。むさ。うら。ま。め
る。五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。

連。五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。
五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。
五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。

狂。五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。
五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。
五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。

五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。
五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。
五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。

五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。
五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。
五月。あ。ま。ん。も。ま。い。こ。め。

詩 五月間五字對句同上

海霧連南極 蓮渚千峰靜
山く木サニツラナリ

江雲暗北津 梅天一雨清
ウニアアヒタトル

詩 五月間七字對句 詩礎

帆開青草湖中 夏亦寒
冬イウニナク

衣潤黃梅雨裏行 連雨來
イウホフツクバ イウリニユク
レウキキル

驚風乱貼芙蓉水 五月寒
キウフクラン テンフヨウニミツ
コケツサム

密雨斜侵薜荔牆 已生電
ヒツツク イバニヘイノカキ
スニセツカス

白々 小雨降さす折
ツバツラチ 小雨降さす折
ツバツラチ 小雨降さす折

黒々 空を曇りて今も降さす
クワニヒキカス 空を曇りて今も降さす
クワニヒキカス 空を曇りて今も降さす

草木 此部より五月一ヶ月の
くこ木の類とあつて

樗花 雲見艸 苦棟 俗云
梅楮 正字棟より

秀 新古今 忠良

夫木 家隆

あふら咲か面の本陰影あて
あふら咲か面の本陰影あて

あやせの朝をすけろく夕を
あやせの朝をすけろく夕を

詞 いづれよりしとまをり。家のお面
 小井つるとしむ。紫雲ふまふ人。
 吹風ふあふ。うきさのあふち。ふ
 こあへ庭。まよ。小井。河。夕
 月教。忘れぬ。ま。た。ま。
 加茂。小井。

連 橋おもむねをたふらふち小春
 あち咲むの梢やまきの枝 絶巴

山梔子花



木丹 越桃

詞 いづれよりしとまをり。家のお面
 連 うらさのこれるものあり 外 新撰
 非 うらさのこれるものあり 外 元隣

狂 はくくこをりしとまをり
 うらさのこれるものあり 古来
 の際飯光廣卿 石榴花

石榴三種あり本紅千葉白千葉
 黄色千葉なり近世桃色あり
 かりて珍らしく愛せり
 新撰六帖

夏川の山松栢咲や峯越し
 ありけりいそひ待り色
 俳 字はゆめ文やまの花は栢如賀

詩 栢栢五字對句 同上

新枝含淺緑 露色珠簾映

脱萼散輕紅 香風粉壁遮

詩 栢栢七字對句 詩礎

風枝舞腰香不盡 不及春

露銷粧臉淚初乾 落絳英

眉黛集將萱艸色 度隙風

紅裙妬殺石榴花 春閨空

詩 栢栢之詞 白樂天

暉々復煌々花中無此芳
 ソコラキラくト見コトニサク此花ニ

カヤウナケシキハ思イガケナキコトノ
ヤウニオモ
ワルトナリ **艶妖宜** 小院修短

稱低廊 ヨクウツレキカイエダモミ
イエダモミヒクイカキニト
アヒヨクサイテアル

女貞 貞木△鼠がら花
五月細白花開く葉ハ

椿ハ似てきこよ故マ姫つづら
又ハ△やま椿と云 薔がた四月草木ハ

繡樹 四五月の頃白花を開く
葉ハ女貞ハ似てきこよ

光あり四時濕き寸只二三分
落葉モニヤ國繪此木の皮と取

てハシ 解ハほほとてきこよありき
夫木 若うとてきこよの枝は味ハ

南天花 南天燭 南燭 野憤
深菽 楊烟 牛筋

栗花 花書黄 排 思んそ義
花扇竹

辟盜賊法

戸の尻ノ木

以栗を用まハ盜賊入らず **杜**

鶉花 さつぎ種類々あり多
其中八木とて賞とる

の松ある。ぐんぐ。さつぎ紅。この
雪。神樂岡。少。さ。あ。あ。人丸等ハ

△五月躑躅とも書く今ハさつぎ
はくろのふ(名)石殿花 花文ニ書ク

合歡花



合昏夜合
青裳萌葛

○花上ハ半白く下半紅るり葉
ハ緑めで夜ハ合す移るり如き

いより移るりの木の中田各なり
○人家ふくへて人をて怒らこ

らし合歡ハ怒りて除き萱州
ハ愁をワるるといハ○黒丸子の
生葉なり 万葉 紀女郎

ひるいさねなるハひわる移るり
君のこみんやまけさ人ふしん

秋のついでなるに花ありぬ縁に花の
神々まほなるに花ありぬ縁に花の

⑤ 花のついでなるに花ありぬ縁に花の
神々まほなるに花ありぬ縁に花の

さうに花ありぬ縁に花の
色々説あり○三才圖會に花を

坂樹とかく花は白く少き
実心まほなるに花ありぬ縁に花の

強瞿。重箱。⑤ 夫木 西行
さうに花ありぬ縁に花の

詞 夏の野。庭の面。あけふ
さうに花ありぬ縁に花の

⑤ 花のついでなるに花ありぬ縁に花の
神々まほなるに花ありぬ縁に花の

車百合 車の輪のごく花ひ
日光の産い黄いろ 姫百

大峯より出るの赤 花ひ葉も小

合 山丹。百合に似て
花ひ葉も小



葉へ柳小似たり花赤
⑤ 夫木 土御門院

庭の面れ去まらざる其花は日よ
らう赤き花は百合なり

⑤ 花のついでなるに花ありぬ縁に花の
神々まほなるに花ありぬ縁に花の

狂 深草小咲く花ありぬ縁に花の
小町小町の花

子であらう花赤 児山丹
開花小く愛を

⑤ 江戸より出づ 唐山丹
赤花びら厚く薄く

さうに花ありぬ縁に花の
白く花厚く本琉球より来

る深山の間繩ふさかりて是を
取得て袂に入きて 鬼百合

帰る依て此名あり 卷丹。花赤く六弁
黒点あり山丹より大

狂 花のついでなるに花ありぬ縁に花の
神々まほなるに花ありぬ縁に花の


秀瓜がさうに花ありぬ縁に花の
花のついでなるに花ありぬ縁に花の

鬼ゆりの名也 **糸百合** (狂) 杜撰
あや色香 立浦

舌をうけし 今 花をうつ 今 花をうつ
ゆり露玉 ○百合 山丹 卷丹 二類

三種あり 此種数品ふるりて 透
明百合 博多百合 黒百合 紅葉百

合紅百合 其外 **紫陽花**
擧げ あざむらさき

 一名 △ 四ひ の花 ○ 花葉
ともよて ありに似たり 唐

の白樂天 初て紫陽 名づく云
◎ 夫木 公朝

乞極 一人のあり 川 あり
さびつて ささるあざむらさき

詞 よひ の花 ハ 子 母 さ
俳 紫陽花 今 紫陽花 嵐雪

紅花 紅藍花 黄藍 吳藍
畧言あり 未摘花 今 紅花

漢張騫 漢 張騫 漢 張騫
天竺より得て 歸る 本朝へ 傳る

呉より種を得たり ○ 申日 種
を抄せ せよ 茂盛と ころり 羽

州 最上 山形 の産を 良と
と伊賀 筑後 九州 豫州 合

治 伊賀 播磨 と 其次 伊賀
◎ 新撰 六帖 為家

紅の末 さく 色ぬく
うの 赤み あり せよ

連 ちび 末つ 赤み あり 赤
◎ 紅花 紅花 紅花 紅花

天門冬花 一名 万年松
金花 高棘 海濱 小生 どり 物

蜀葵 花五六十種 あり 色数 品花 形子
辨 ○ 五月 下旬 花咲 下より 上母

咲の かり 開き 盡る 時を 梅
雨の 終り 寸 大底 あり 錦

錦

錦

錦

葵 花の大さ錢の大さ
白赤二種あり開るそ久し

龍葵 莖葉のつゝ似
て実ハ茄子に似

似たり其始青く熟ると時黒
く或は熟して赤き物龍珠といふ

萱州花  忘憂鹿
鈕のそ子

黄赤百合に似たり住吉の景物
かり 夫木 為相

下細くはきくまのつゝ
こころふるまぬ人の世もあ

非忘憂はた分異されけは 荷兮
萱州の花とまや思まき若の末山

詩 萱州之詞 唐 李咸用

芳州比君子 詩經ニ
見たり 詩人

情有由 是ハヨシ
アルコト 抵應憐雅態

未必解忘憂 花葉ノ風流温雅
ナルヲ愛シテ憂ヲ

忘ルト云コトハ解 積雨莎庭小

微風鮮 砒柔 雨ツキニテ莎草
シケリハハ風ソヨキ

黍漚ナリ 莫言開太晚猶

勝菊花秋 花ノ晚キヲ 外ノ玉ヲ
ツレカラ見レバ 早シトナリ

下毛花 繡線箱 花の葉に似て小き

花をのろく 金盞草 花黄之白
淡赤色あり

金錢花 花紅み 金銀

花  忍冬の花之黄白
交咲く故に名つく

金銀花 花紅み 金銀

種類中多異名秋菊の所あり
夏菊ハ伝令ハミヤノ様宗節

夏菊

茴香

色薄黄



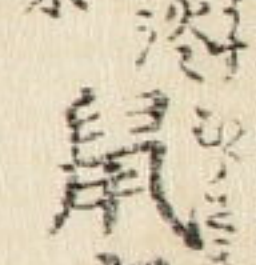
時計草



花日の内小つるくかりる
是ふよて時計の名あり

威靈仙

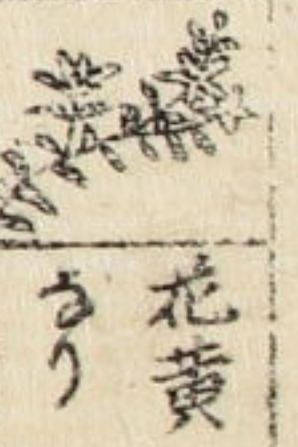
花淡紫



鼠李 鳥糞子 牛李

美容柳

金網桃 未央柳



治積痞法

九州大祿の諸士
平素積を憂ふ死ふ至り其

子小遺ちりして死せば腹をさ
き積と見て何もの相とさす
是を見よと命と子遺命と
だがかく上は訃へ腹をさく
果して積塊あり甚どか
利刀とるも刺くわく種
種の菜物を以てそげ共る
変せど其中一人楊枝を以て
飯初ふす其やうしたふとを
ふ是びやう柳を作る楊枝と

故は右柳の葉と煎してをぎし

く其積塊たりまら消滅と云り

酢漿草花

一名酸母。片葉三つ
ある故り

蛇床子

異名 塌靡。蛇床。蛇粟。
蝮床。馬牀。花白く攢

マコウ 蛇喜んで此草の下に
其寒を食ふゆへは名つを

蕺菜花

異名 蕺菜。魚腥草
花四葉以て白葉鱉

草石蠶

異名 其露子。土蛹
滴露。地瓜兒。五月

根と堀り蒸し煮て食ふ味
百合のこく根老蠶のじ故名つ

菘葵花

多むついでる。なま
本草綱目云其莖

蔓ふ似て強く刺あり葉馬の蹄
のふくくしそ光沢あり秋黄なる

花とひくくしそ。俳諧の季
は古来より夏とす故爰は出す

天南星花

一名虎掌。和名
ふんぼそみ

苔花

一名地衣草。淋雨の
時花の形のつた物也

生ど是を苔の花とつたり

種類。石菖の草花まへのこ

井中苔ありき井の中へ生ず

垣衣ふれ垣の北陰へ生ずる

のりあり又石上へ生ずる月のと

昔邪と名づく一名烏韭又屋

上へ生ずる者と屋遊又凡松

一と昨葉何草といふ。玉柏石ふ

生どかまら松の朝菊

おとく紫色あり朝菊 四月
五月

の内紫碧色の花といふく

朝開き暮よふむ故小名づく

豌豆引 一名胡豆。胡戒又翻

揺。花の形蛾のこ

蠶豆引 其莢上へ向ふ故小名

づくひくむ取取るなり

花且見

菘のこへ。花さへ
うらあもの事ともいふ

万葉むとむし。さうふあつた

うらあつてもまぬ恋もすうも

花菖蒲

花葉かまらつる小似て
紫白飛入種々あり

菖蒲

軒よりあけらるる泥
菖蒲より石菖蒲の

小葉あり盆中ふうへて受す

る。奇なりいづれも混してあ

やめくつめり茶とすらの石菖

根より根の長さか賞かくて長さ

根とよ名り委しくい九丁目有

年中行す。 経賢僧部

みさあ。あめのためとあやめ茶

ひのけつ。さもあ。い。らん

家集 雨中菖蒲 法性寺入道
雨よまの玉とそらうらあや花ま
とん茶よとらうあれあや
白川殿 菖蒲
ふらののねはまのぶよあはは

又さういへばさきもゆん洋乃
傍りも出あ中川のあ

⑤ 藤 藤花馬
あらし家々咲く由

水蘊 △藻とゆ △藻川舟
貫之

⑥ 夫木
りりかもし今日こ言して花あり
みくれてよく玉をくぐらん

⑦ 池をたぎらぬ國のしほ堂嵐雪
⑧ 藤花を金魚の 鉄線花

⑨ 二月 苗宿根より生む
四五月花咲くありはふ

⑩ 故に名づる
詩 鉄線花之詞 賈昌期

披雲似有凌雲志 出タル
ケレキ出世

⑪ 向日寧無捧日
見ヘルヲ

⑫ 心 日ニムカイテ花ノツカヘ
ウヤニフテノ心テアラウ 珍重正月

松好 依 托 ツルクサナレハヒトリラ
ルコアタワズ松ノ木ニイ

カ、リ 直從平地起千尋 雲
タルヲ

⑬ 出世ノコロサレトゲ
テ松ニヨリテ高クホリユタツ

⑭ 藤子 瞿麥の 藤 麥
南天竺草 天菊

⑮ 大蘭 巨句麥 洛陽花 よりた中
。多あり中石竹 △常夏 △あはこ此三

⑯ 品同種へ 今分けて二種 手花
びりの先ぐりきさみ有て切し

⑰ ありものそまてしことし切し
まをさきものそ石竹と名づらん

⑱ 葉よ用る 瞿麥 △かりしほにて
或いのせれちくし人の之花色

⑲ 薄紅あり △倭撫子 莖葉あり
かく花紅紫白 單葉 千葉 數種

⑳ あり △藤撫子 莖ふく 葉あり
それらへさく 貞桔梗に似て白

㉑ 紫を帯る △阿蘭陀石竹 莖葉
ふく 葉こわく花は又とくはて

大輪より○京撫子株ふく草
かき葉やぬとより大きく花一
重紅より其外数十品あり

家集

俊頼

君り代のたきよへり春日祥の
つれ糸に花されみけり

久安百首

俊成

巻の面のき地乃上のわしき
ちとよふちのりところのちを

拾玉

久受瞿麥

慈鎮

ふりこけりぬさふさふを
おまふおふららるるいはい

家集

瞿麥夾水

伸正

夏草の下ゆ水よりさくれて
ふさくふさく入ちまてしこ

○按むるに大鏡の裏書よむら
一深殿の后を撫子の神と申

せしゆ御名をさぐりて此草
の名は常夏とさふりとのり
まふればなごりことなるけり
同トのあふり

詞

嘆息。句。ら。ら。ら。か。綿。つ。ろ。く。
は。な。垣。根。を。さ。ら。と。ま。け。み。や。中。

嘆息。ら。ら。ら。床。し。ゆ。ら。ら。ら。
と。よ。む。べ。ら。ら。ら。お。ま。を。ま。

よ。む。を。ら。妹。は。い。り。我。わ。ら。こ
こ。の。の。の。を。く。と。ま。ら。り。紅。を。

か。く。れ。る。井。日。々。し。の。を。く。
大。和。を。を。し。こ。を。ま。ら。り。

こ。は。子。の。よ。そ。の。あ。か。さ。を。て
し。こ。お。ほ。し。ら。ら。ら。い。け。ら。ら。

ア。を。と。野。を。の。か。れ。と。あり
大。和。を。か。く。を。ま。を。を。ま。ら。ら。

先。り。を。あ。つ。ま。を。ま。ら。ら。今。夜。こ
を。く。と。を。ま。か。り。を。ま。ら。ら。

ま。ら。ら。こ。ふ。と。ま。ら。ら。こ。

○連。怪。子。の。白。花。の。如。の。を。ま。ら。ら。

○非。怪。子。の。白。花。の。け。ら。ら。の。白。之。

○家。集。ま。ら。ら。の。の。を。ま。ら。ら。長。水
い。も。ま。ら。ら。の。を。ま。ら。ら。白。水

狂かといふを向ふ人ありおゆの
あこらう人よふじこのまふ行風
おゆふより長風引てやむにこの
鼻さへくくと入るおけぬ 全

詩 瞿麥之詞 唐 司空曙

一 自幽山別相逢此寺中

てハカタ幽山ニテ見テカラマタ
此寺テオホクノ花ヲ見ルゾ 高低

俱出葉深淺不分叢

ト 野蝶難爭白庭榴暗讓

紅白キ花紅ノ花外ノモ 誰憐芳

草色春露到秋風 花ノウツク
シキヲ其
スルコトバナリ

田植 △早苗取。苗の長七ハ
寸の時うつ植るとつゝ又

早苗とるいもうつもつゝ
非 合羽着て友とあつて國々其角

早乙女 女の苗と植る云(非)早乙女
のよこれぬ教い朝み其角

田歌 苗とるゆる時声とあけ秋風よ
(連)声の色も美苗まゝ田舎の袖

非 早乙女の赤い止るり 都云梅侯

田草取 苗とるへて十四五日心
つらとれへ上りりい

見えされも草の根土中よえび
くはり早く美苗とるいもい

そくさるは草の根こいり
苗とるぬる十四五日にて草と

報 其後ヤクても草とふと
報 鋤しつゝの季ハ六月と自

新撰六帖 和家
まののころあつて種まはるる

非 美ふ子こゝろをてまゝの田面外竹戸

早苗 △若苗△玉苗。初かんへ
○ワタ入

○四月とあ五月中人は苗とるゆる二平
日程して八九すより一尺やよ成ると云

〔連〕花さる竹ふもつちいあ糸の宗祇

〔非〕美竹や鞍小ひつちあお根山 其角

〔あ〕竹や雪のまきまきこぼば 乙由

〔美〕弁のうしつたてを雀うを 龜洞

○竹そろうゆ竹解日小かきうさ

正月朔日二月二十日十二月十二日か

うゆべー雨後うゆまの活し安し

○信濃の竹をーあはれも竹の

るり 正月小れ松をうり 篋竹

立て竹のかざりす

細長く節ひびきて 業平竹

直ちり矢竹小用ゆ

雄竹の如く節の雌竹小似し

女竹男竹の見分るささめ業平と云

観音竹 葉短くは 志る竹

かき竹 布袋竹 太き竹竹こ

れ如し 竹皮散 季に

つそ作り

用ひきくく次竹の皮しるん

六月の季とす竹の皮と

〔異名〕氷臺 黄草 堅草

艾 白蒿 艾刈 ともたれと

たかりにいてい季なり

〔考〕のちれ麻の強なくぬるこ

りんの中れ巻はして 時頼

○俗蓬の字を書き蓬ハ惣名

種類多し千年艾 くらしよしよき

草花蒿 白蒿 角蒿 茅草

まてもくろ

〔異名〕艾草 蔣草

真菰刈 皮こもく斗の雑こ

○古代俵み作る今稲蒿を以て

作る物そまもといへは是はなるこ

真の菰の詞とたてまもといふこ

○今ちまことまもものさう 奥

州はひりー昔蒲さー瑞平小

これ軒小菅さると

〔考〕古今

貫之

美菰うる度のはあ雨はまこ

はきよりこゝろまきりて
俳 初日教まぬいあはれ
石菖蒲

石菖 能 石菖のゆへに
白く泉の形 移竹

私布刈 正字石菖の紀州
加田より出るといふ

の類なり **海帶刈**
類なり

こがえの對ふよりて名づく
ふまう刈はかうさうなり

李子 名 異 嘉慶子 明李 來留
居陵迦 沈朱實

詩 李之詞 唐 李嶠

潘岳 間居日 潘岳字安仁ト
此故事文選ニ

アリ漢ノ **王戎** 戲陌辰 王戎が
代ノ人ニ

故事 **蝶遊** 芳徑 覆 若徑ハ花
ナリ 蝶遊 芳徑 覆 若徑ハ花

バタカウバ **鶯囀** 弱枝 新 弱枝ハ
シクヤフス 鶯囀 弱枝 新 弱枝ハ

枝 **葉暗** 青房 晚 音房ハフ
ナリ 葉暗 青房 晚 音房ハフ

ノ実コノトキ葉々 **花明** 玉井春
レゲリニスナリ

李花 ハスクレテ 鮮明ニ
シテ 透徹ルナリ 方知有靈

幹 李樹ノミキニハ神
具ノキハメテアリ 時 用表真

人 ソレユヘ李ヲ神仙ノ
人ニタトヘタリ

李 晋ノ王戎七歳ノ時
諸ノ小兒ト道傍ノ

李 ノ樹ノ下ニテ遊ブ李子ノ多
キヲ見テ枝ヲ折ル小兒競ヒ支リ

我先ニト拾ヒ取ル中ニ王戎ハカリ
取ラントモセス人ツノ故ヲ問フ王戎

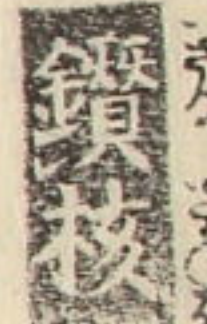
ガ云ク路傍ニアル李ニテ人モ取
ズレテ然モ子ノ多ナルハ必ス苦キ

李ニテアラン此故ニ我ハ取ラスト
答フ果シテツノ李苦クシテツ

毛食レザリシト **龍** 李ノ肉
厚アリ

世説ニ見ヘタリ

テ核ノナキハ龍ノ耳ヲ割ル
其血ノ落タル所ニ李ヲ生スルト

イハ  王安豊好李ノ木ヲ
持價貴ク賣ル

他人ノ種ヲ植ニ事ヲオツレ
テコトククツノ核ヲ鑽タリト之

李接法 桃木小とくくの枝と

はちを突くはぬあてあはし

楊梅 異名 杣子 聖僧 やまめ
紅白紫の三種あり泉

州大義は生ごりの丸佳なり
非中ぬふあつるまは経の香承我

詩 楊梅五字對句

冬花採盪橘 冬ハ橘ノ実ヲ花
ニタトヘテトリレゾ

夏菓摘楊梅 夏ハフヤモニシク物
ナキヨツテツミトルナリ

詩 全七字對句 詩礎

樓閣兩山搖碧落 コブホレニ
ハルニスエサク

楊梅千澗瀉紅泉 イツテイハナ
ニハニヒラク

高林帶雨楊梅熟 コキヤウハナ
故園春

山岸籠雲謝豹帝 ホニテアミテヒラク
帝雨閑

詩 楊梅之詞 唐 李嶠

折來鶴頂紅猶濕 クハクハヨ

丹頂宛破龍睛血 トクシク
味乾神

若使太真知 コト
荔枝馬

得到長安 カキハ長安ノミヤニニ
到着スル事ハアルマジ

氣條挑 あくのえんを振よ
をひの実多く大い

無花果 映日葉優曇花
花をくして実あり

初青く熟れば紫黒色味甘
淡し〇涅槃經云く佛出世

鳥曇花トウモロコシの喩へて稀なる事
 以て即ちの無花菓の事あり一
 千年の一度花を開くと云
 八安ヤス誕タマありハ五椿イタドリをめぐ
 君の代は百回ヒヨクの咲ハ
 優ユウ早サイをた乃ノるハ
 天仙菓テンセンカ

和州山中あり花をくると実
 をひくと枇杷ヒトリに似て小コい
 児好んコト枇杷ヒトリ能レ氣キのノ殺スり
 で食ふク枇杷ヒトリ能レ氣キのノ殺スり

光廣卿ミツヒロノウヂ 主母虫ヌメふ刺シまてゝる治法
 刺シまてゝゝみ志シのびビつたの
 に枇杷の核を甜ニくしてこれを
 はくまをいふ頃トキみ治す

詩 枇杷五字對句

揚柳枝々弱ヤウリウシヨク 媚々碧海風メメクキカイノカゼ

枇杷樹々香ヒトリノキノカサガハナ 濛々綠枝香モウモウキナノカサガハナ

詩 全七字對句 詩礎

回看桃李都無色ケキアルヤウハニチカホリガカリ 對春溪カゲトガニル

喚得芙蓉不是花カントクソフヨウマコレハナナラ 正滿林カニニリ

万里青障蜀門口マンリシヤウシヨクモンカウ 味尚酸アジニタラス

千樹紅花山頂頭センシツクハサントウトウ 溪水流ケイスイノナカ

青梅アヲヒメ 梅清ウメスミ 餽梅クヱク 煮梅ニク 梅ウメ

連青梅の葉をよめけのいふツルアヲヒメノハ 狂キヤウ 嬌キヤウ さいサイ 紫ムラサキ 梅ウメ のノ 一ヒト ツツ くるク 社シャ 園エン

狂キヤウ 嬌キヤウ さいサイ 紫ムラサキ 梅ウメ のノ 一ヒト ツツ くるク 社シャ 園エン

詩 青梅之詞

天賜胭脂一抹腮テンキツアザシイ 胭脂アザシイ 紅ベニ

り盤中磊落笛中哀リハナカハライロフエノナカニアハレ 落梅ラクメイ

曲アリマカサキ 雖然シカドモ 未得ミダケ 和羹ワカウ 便ニ

益毒和莖ノコト 醫輿將軍止

書經ニ見ヘタリ 渴来 毒酸ヲ渴ヲヤメシ故華

ナリ將軍ハ曹操ノコト 羅隱

杏子 甜梅。酸い根の味甘く

さくものろり石を根に置

てかりはまれば実多し

櫻桃 紅色多くと朱櫻と紫色

名づく味尤美之黄多くと蠟櫻と

の薄紅を櫻珠と名づく

○中夏天子は含桃と名づく

事あり礼記に出る

詩 櫻桃之詞 王維

勅賜百官櫻桃

芙蓉闕下會千官 御殿ニ官

人ヲ集メ

アテ紫禁朱桃出上蘭庭

ニテ櫻桃 纔是寢園春薦後

ヲ賜フグ

春薦先祖ヲ 非關 苑鳥啣

春ニツルナリ

殘 春薦ノヒモロギニテ 帝安競

御苑鳥ノツキニ三非 莫草競

帶青絲籠 退出ノキ 并領セン

中使頻傾赤玉盤 ツレクニツケ

飽食不須愁内熱 内熱ヲヤ

ヒナニ 大官還有蔗漿寒 高

ノ官人ハアトデヒヤリ

砂糖ヲ用ユルナリ

桑實 正字 青小柚 青く

薑 狂 かくの冷ひを合ふに

生胡桃 新撰六帖女がくは

持扱ふかみ 早松茸 五月

あり 光俊 出るを

四五五月雨後、生ると早初と云

① 風葉をさやかしを早松毒風葉

② 茄子 (異名) 崑崙瓜 草薺甲

俗諺、秋茄子嫁小い

をみるといふこといふへよりい

いはくへし幸や万葉集

の中いこころ

③ 秋茄子はつとけいふつゆ

④ 茄子はつとけいふつゆ

⑤ 茄子はつとけいふつゆ

⑥ 茄子はつとけいふつゆ

⑦ 茄子はつとけいふつゆ

⑧ 瓜の花 甜瓜、越瓜、姫瓜、浅瓜、胡瓜とて花咲

⑨ 瓜の花 甜瓜、越瓜、姫瓜、浅瓜、胡瓜とて花咲

⑩ 早瓜 瓜の花乃茶支考

⑪ 夫木 定頼

⑫ 瓜の花乃茶支考

⑬ 瓜の花乃茶支考

⑭ 瓜の花乃茶支考

⑮ 瓜の花乃茶支考

⑯ 瓜の花乃茶支考

⑰ 瓜の花乃茶支考

⑱ 瓜の花乃茶支考

⑲ 瓜の花乃茶支考

粟時 句小むまの夏守
夏粟二月より

五月まをまうく秋粟ハ六月
下旬より七夕頃まをまうく

稗時 五六月時とまごめ
ぶりのまう洪水或ハ早損な
この時苗のあま作てまうく

秬時 四月五月まごば小ま
びハ六月小ままうく

胡麻時 四月五月雨うてま
こある時まうく

種植 秋大豆秋生豆櫻
楠芥菜菜豆

栽 菊椿梨 壅土培 橙
植替

挿木 梅花
芙蓉

茶 石榴 櫻桃 薔薇 山茄子
梅雨の中枝と切て地ふまうく活す

蓮房 沢瀉 杜仲 菱
葛 菱 苧 乾漆 藍

收採

生類 此部ハ五月の諸
の生りのとす

獸狩 射 火串
射ハ唐土ハ四季あうて

夏の狩と苗とつハ王者は族乃
狩ハ和ハ即獲物の宗廟供

下ハ士農工商ハ本邦の人のけり
をてとつハ夏の殊ハ草摺せん

恐て是を防ハ故ハ素とむる
なりハ狩ハ夏の狩と云ハ

火串とつハ夏の小火をさ
て山中ハ入まハ鹿その火子

と身を弓にて射て取る
ハ

夫木 小辨

夕されり此ハ狩人
中ハ

中ハ

中ハ

家集 照射及曉

頭季

ついでとあつたいれおきねいづつふ
あふさうしんしんあうりたり

① 論ては。新。光。りゆか。あうじ。

さげあひ。あきふたの。あけこを
照と。あつた。木のふたの。あつた。

てらす。夏ふ。あつた。あつた。あつた。

めいせ。あつた。あつた。あつた。あつた。

どりの。あつた。あつた。あつた。あつた。

② 運。あつた。あつた。あつた。あつた。

③ 狂。あつた。あつた。あつた。あつた。

鹿子。あつた。あつた。あつた。あつた。

魚藻。あつた。あつた。あつた。あつた。

打。魚藻川中。木と。うらて
網を。ひて。魚と。取。此。木と。打ん

④ 夫。あつた。あつた。あつた。あつた。

水雞。種類。数。多。あり。此。頃
あつた。あつた。あつた。あつた。

淡黄。赤色。と。帯。ふ。ひ。ひ。白。く。尾
短。く。足。長。く。夜。鳴。て。且。あ。達。す

其。声。入。の。戸。を。た。く。と。く。と。く。と。く。

⑤ 夫。あつた。あつた。あつた。あつた。

家集。海辺。水雞。中。正
あつた。あつた。あつた。あつた。

拾玉。水雞。何方。慈。鎮
あつた。あつた。あつた。あつた。

亞。提。水雞。驚。眠。稚。親
あつた。あつた。あつた。あつた。

あつた。あつた。あつた。あつた。

詞。たぐき。ゆらぐらぐら。おもしろい。
夜。おもしろい。おもしろい。おもしろい。
おもしろい。おもしろい。おもしろい。
おもしろい。おもしろい。おもしろい。
おもしろい。おもしろい。おもしろい。
おもしろい。おもしろい。おもしろい。
おもしろい。おもしろい。おもしろい。
おもしろい。おもしろい。おもしろい。
おもしろい。おもしろい。おもしろい。

竹田に里

連。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

非。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

狂。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

黒息。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

息。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

野鴨。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

水鳥。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

浮巢。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

諸鳥。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

毛。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

鶯。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

月。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

伯。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

と。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

ず。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

と。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

はのみと拾芥ふ有えず 鶉うぐいすの
とぞうり秋たう

巢うぐいす 葦原あしはらの巢うぐいす 蛆うぐいす ひまう

初蟬はつせみ △蟬の初声。此ころ
早くかきせり

非ひ初蟬はつせみや笛ふえふけ 蟬せみ △空蟬
を十文字其角じゅうもんじ

蟬せみの五徳ごとくあり 頭かぶふ縁えんあり文ぶんく
露つゆとのひ清きよの時節ときふしとたんと

鳴ない信しんの黍稷ととを享うけずるの麋かん
とる所ところ巢うぐいす穴あなもとむとるの儉けんあり

新古今 撰政大臣
秋あきらうれれ丸まる々の表あははる蟬せみの
海うみの東あづまや下しも系けいそひりん

夫木つまき 俊賀法師
夕ゆふけのそひ林はやしふくせふ乃なり
おんもとるんそるくきらる

龜山殿かめやまのどの言こと言こと 樹陰じゆいん蟬せみ 有光朝臣あうくわし
夏なつふく着きる本もと陰かげふあくせし乃なり
しとるしゆき巻まきのゆへう芳よし

詞ことば 吟ぎん声こゑすく。伝でん声こゑ林はやし表あはすくろ
うりき。耳みみねるもも。夏なつ山やま燈あかりの
羽衣うゑ。声こゑさり。梢しやうふ雲うゑく。つはく
松まつ風の音ねははる。羽うふくあ。あは
引ひきまう。風かぜふさる。雨あめふさる
まうて。雲うゑの林はやし。夕ゆふ。相あひふふ
連つらを蟬せみの学まなぶ。うさる。きらる。紹しやう巴ぱ
非ひ隣りんくは本もと裏うらひや蟬せみのそ。其角そのかく
狂きやう帆ふねふくはし。見みる。や。船ふね園うゑ乃なり
このことへ。蟬せみがさうつ。く。春房はるふらう

詩うた 蟬せみ五字對句 同上

客吟きやくぎん孤こ嶠きやう月つき 盤ばん雲うん雙さう雀せき下げ
ヒトツクヤニテシラツクハ
ス。メ。タ。カ。ク。ト。ヒ

蟬せみ噪な教を枝えだ風かぜ 隔へ水みづ一ひと蟬せみ鳴な
正ただ々ただくニナクセシ

詩うた 蟬せみ七字對句 詩礎

数家すうか茅かや屋や清せい溪けい上うへ有あ蟬せみ聲こゑ
タニノホトリノイニ井

千樹せんじゆ蟬せみ聲こゑ落らく日ひ中ちゆう 夕陽ゆふやう中ちゆう
ユツヒニナクセシ

詩 蟬之詞

虞世南

垂緜飲清露 流

響出疎桐 木ヨリ出ルトレ 居高

聲自遠 夕カキホニ居テナキ 非是

藉秋風 コレ風ノフクフカ

故 齊王の后王を怨

化して蟬とまり 樹ニ登リて鳴ク

ゆへに蟬を齊王女と云ハカ

飛集 深の葉昇通

後中書即ふ除く 時亦飛

蟬有て昇テ冠上ニ集ルゆへ蟬の祀

鼓虫 小サニ黒ニシテ水と

小鱖 鱖の小ニシテ

水馬 鱖虫ニ錫賣とも云池川

赤色めで難節ニ似たり 一説
味甘く錫の如くともいなり

焦螟 小サニ事なるとん方かこ虫
とつう故に蚊の嘘ニ集リ

居る 蛇脱皮 髪生妙方
のる元

餽餼の粉を水とて移りこひ膏
茶とのるどく蛇の衣とよれやの

廣く不切り右のうへに粉ふれを
付元る所は髪をさぐる事妙也

必用 此部は五月一ヶ月
要用の事とあると

破 夜五ツ 夜四ツ 夜九ツ

軍 午ノ方 未ノ方 申ノ方

向 夜八ツ 夜七ツ 朝六ツ

方 酉ノ方 戌ノ方 亥ノ方

時刻 午は日午の刻事と云は
用ゆべし月建なり

卯ノ方 辰ノ方 巳ノ方

出行作事 西北の方小向の
ことり 今月

天道西北より 樂事 月令より此
行が成るる

月や高眺る居るべし遠きと
眺望する山林遊ぶべしと

あり夏山のけしき草木や、
さうまげり青きとくくく。

うらひのいまどあつともはのみ
多ふこれよまを日ハ長く

變るべし早苗ゆるもあざ
り〇螢見諸神諸社のけい

を〇五月雨をいへんとくくめ
てまのあつちり同心の友と

ちかたりあひ書さど見るも
あよみそたのむわたり

天氣 此月袍雲起まれば舟人
くはさくくは是暴風

稲豆宜し〇當月不熱十一月
不凍〇月内寒くれば早け兆え

養生 今月以後天氣熱する
漸々なり謹んで風

地より生れ冷の物を食とく
くは是をおこせば悪疾癰疽と

生と〇此月屋根より上る事と
忌む精神と脱と〇滋味と薄

く〇和と極る事みくは者欲
と節より天樞中腕より灸と

大暑のく免えありしめ保養
とく〇精氣を放散せしむ

ゆるし保衛とく〇遠望
とへし高明る居とく

衣服 當月四日まで 袷を着す
五月より 帷を着す 襦袢黄

女衣服 四日まで 袷を着
とく〇男子と同 時

衣 菖蒲衣 表赤 裏白 杜若
衣 紅 黄 青 棟衣 表白 裏赤

夏月衣服の穢と去る法 冬
の汁のく洗ふべし能あたる

又法 枇杷の核を細末にして
へそようへ去るなり 又法 梅の
葉を煎じて洗ひて

青梅枝葉ともふえり貯るる法

青梅の枝折を兼も実も藁
とろろく巻きて別な梅と皮む

さて水は漬し醋と出し其醋
一外に寒の水一外に合和しく

漬とくべ入用の時とり出し水
に生るるべ葉も実もみりどし

てよく持つ 烏梅と製する法

青梅をとり皮とくぐり核と去り
かごふ入火上かけり置て後せめ

用也 年中青梅と貯る法 青竹
を二つ小割り青梅と入せりとの如

く合せ藁とそくく其上を山土
かて塗りさめ地を掘りて埋め置

べー来年もそく損せりて持つ
用る時竹を引とり入用や取

りぬ如く埋め置べー

五月飲食料理献立

好温暖の物を食ふべし此月
物腹中却て冷物よりかきん

禁 冷物及び生瓜蜂蜜と忌む
物○びこと焼肴一時小食ふべし

谷川の停水を飲べし魚鱈
のよし水はあし是とのあし瘕とる

料理 汁 小豆 芋 竹の子 丸い とうもろこし とうもろこし

たい ほうろく 清汁 ほうろく ほうろく

塩いなり 鱈 たい 赤貝 白うなぎ

ほうろく ほうろく ほうろく ほうろく

差味 松菜 ほうろく ほうろく

煮物 ほうろく ほうろく ほうろく

吸物 たつぎ
あつぎ

やさいあゆ
くけの子
さかづち
小いし
まそ
うづ
青
和

會物
くしこ
きんぎょ
ゆきあへ
たつぎ
きんぎょ
びくまあへ

小るい
あひら
あひら
三三三
青あへ

精汁
あたま
あたま
あたま
あたま

清汁
あたま
あたま
あたま
あたま

膾
あたま
あたま
あたま
あたま

差味
あたま
あたま
あたま
あたま

者物
あたま
あたま
あたま
あたま

和會物
あたま
あたま
あたま
あたま

吸の

かいご
牛房
うど
早

五月用意の品
左
す

貯生姜法
竈の前の土
掘り底
上
て

生笋貯法
生笋
石
生

薑塩漬儼る法
薑
梅
少
べ

梅酢
少
べ

少
べ

べ

べ

べ

てし 黴かびはくく次

魚王子うし法り

極暑の時魚を三枚はまろし大鉢に水一盃入置き塩を入るる其後玉子を入れて見ると

玉子沈むるは又塩を入るとかちんよけまの玉子うる物ん

このかけんにて魚よくたもの物也 梅酒の方 古酒 一キ 梅子

砂糖心次 右梅少しも疵のまをを見て花のさけをとり 飯粒として

一夜灰汁の漬洗ひ水氣をぬぐひ酒へ入ふなり 飯の餛いんざり法

菟の葉と飯の上におかしく一夜を経てもとろくこと 生魚と

賜たまふ法 餛いん鈍どんの粉をうめて其中小魚をほみ油を入れ置

損いとる事あり 又方 寒中の雪水ゆきみづをひしおけり久し

く損いせり

五月部終

三省

梅を堂

